

校長室だより

日本福祉大学附属高校 2021年3月3日

万人の福祉のために

真実と慈愛と献身を



卒業式を挙行了しました～今年も規模縮小・短縮で～

今年度の卒業式は昨年につき、新型コロナウイルスの影響により、規模縮小・時間短縮・間隔を空ける・換気に注意などに留意をして挙行了しました。

校長式辞・来賓（理事長）祝辞の後、在校生代表挨拶、卒業生代表挨拶など、短時間でも心に残るものとなりました。保護者の皆様、御協力ありがとうございました。



（校長式辞より）抜粋

今年度は1学期開始から2か月間の休校を余儀なくされました。ようやく6月に再開できましたが、運動部などの公式試合が中止になり、最後の試合にかけていた皆さんにとっては、さぞ悲しみや失望が大きかったことと想像します。和太鼓部のある人は「部活もあと1年という時期に、演奏も中止になり、なんで自分の代だけこんなに苦しい思いをしなければならないのか」とか、「コロナウイルスというどうしようもない敵が現れ、自分たちの部活をめちゃくちゃにしていた」と悔しい思いを卒業文集に吐露しています。他の部活動の人も同じ思いだったと思います。

そういう中でも、あきらめず自宅でも黙々とトレーニングを積む皆さんの姿を見たり聞いたりしました。そういう地道な努力が実り、野球部のように県独自の大会で3回戦まで進出するなど練習の成果を発揮してくれました。そのことが後に、後輩たち新チームでの全尾張野球選手権大会優勝に結びついたものと思います。他の部活動においても、目に見えないところでの苦労や努力があったことと思います。

文化祭は、少なくない学校が中止する中、開催が心配されましたが、2か月遅れで発足した生徒会執行部にも関わらず、積極的に手を挙げてくれた3年生を含む執行部のひたむきな思いや、音楽部や吹奏学部、ダンス部や演劇部そして和太鼓部など文化部の人たちの熱い思いが実り、オンラインを活用するなど創意・工夫で開催にこぎつけることができました。

一番の中心である進路実現においては、コロナ禍に加え、今年から大学入試が変更されるという二重のハンディを負うこととなり、様々な不安があったことと思います。にもかかわらず今日の時点において大学進学率や難関といわれる大学に合格した人の数は、例年に比べ大きく前進することができました。残り一か月近く、最後まで力を尽くし、全員が進路を決めてくれることを願っています。

皆さんはこの苦難とも言える時期を耐えるだけでなく、ハンディをも克服し、勉強も部活動も生徒会行事も進路実現もすべて全力でとりくんでくれました。そのことに私は「本当によく頑張ったね」と惜しみない拍手を送りたいと思います。物理学者アインシュタインは「チャンスは苦境の最中にある」という言葉を残しています。どうかコロナ禍のピンチをチャンスに変える逞しさをやしたたかさを持っていただきたいと思います。・・・



卒業文集「マスクット」完成

マスクットは「一人一人の個性が集まって一房になる」という意味が込められています。教職員、卒業生全員の言葉や、部活動代表者の感想、保護者の言葉など読みどころ？満載です。卒業後もこれを読んで高校時代を思い出してください。



卒業生代表の言葉（一部略）

○3年前の入学式、この場に立った私はグローバル英語コースに進み、英語の習得を目標に掲げている決意を話しました。振り返ってみると、その日から今日までの3年間は瞬く間に過ぎ去ってしまいました。

私はグローバル英語コースに進み、たくさんの経験を積むことができました。特に台湾で開催された国際プレゼンテーション大会は自分に自信が持てた良い機会であったと感じています。代表生徒に選ばれたと聞いた時、自分の未熟な英語力でプレゼンテーションを行うなどできない、それに加え、台湾の学生と協働でプレゼンテーションを作っていくのは無理だと思っていた。ホームステイを体験するのも初めてだったため、不安と緊張でいっぱいでした。

しかしプレゼンテーションの練習をしていく中で、徐々に現地の高校生とも打ち解けていくことができました。現地で交流を深めていく中で、日本と台湾の文化や価値観の違いについて考え、そのことについて現地の高校生と意見を交わすという貴重な体験をすることができました。この経験がオーストラリア語学研修はもちろん、卒業後の進路選択にも役立ったと感じています。

私は先生に提案されるまで別の大学を志望していました。夏休みの保護者会で立命館大学に挑戦してみないかと言われ、グローバル英語コースで身に付けてきた力を発揮する良い機会だと考え、受験を決めました。夏休みから受験日まで苦難の連続で辛すぎた日もあったけれど、先生方のサポートもあり、入試に全力で臨むことができました。

高校生活を振り返ると、グローバル英語コースに進んだこと、国際プレゼンテーション大会に参加したこと、進路選択においても踏みとどまらず、新しい一歩を踏み出して本当に良かったと思います。大学生、社会人になっても新しい一歩を踏み出すことを恐れず、様々なことに挑戦していける人になりたいです。（N.K さん）

○私が3年前「この高校で野球がしたい」「大学に進学したい」という漠然とした2つの理由で、この日本福祉大学付属高校の門をくぐりました。硬式野球部は、中学野球のクラブチーム出身の選手や、小学校からの顔なじみの選手などいましたが、新しい環境で野球ができることに、不安な気持ちと楽しみな気持ちでいっぱいでした。1年の秋から背番号をつけ、試合に出ている同級生の姿を見にする一方で、自分は2年生になっても練習試合のベンチに入ることでもできない時期もあり、挫折感を味わう場面が多くありました。そのような時期やつらい時を乗り越えることができたのは、確実に仲間が存在があったからです。たわいもない会話で盛り上がり、ふざけあったりした日々を思い出すと、私が過ごした高校生活はとても充実していたと感じています。そんな仲間がいたからこそ、自分の刺激となり、互いに高めあうことができました。監督が私たちにかけてくださった言葉からも学んだことがあります。特に私の心に残っているのは「率先垂範」という言葉です。人を動かすときや、人の上に立つときに大事となる力をこの言葉から得ることができました。また、私の心の中に「悔い」として残っている出来事があります。3年生最後の引退試合で、自分の役割を果たしきることができませんでした。「あの打球がとれていれば」と、今でも頭の中をよぎることがあります。この悔しい思いは絶対に忘れることはないし、今後の人生でこのような「悔い」は残したくないです。

部活動を引退すると、進路実現のために毎日学習を続けました。2年生の前期までは、ただ大学に進学できればいいなと思っており、将来やりたいことなんて考えてもいませんでした。しかし11月のある日、「街づくり」について学ぶことのできる機会があると、先生から教えていただきました。参加してみると、自分のやりたいことは「これだ」と発見することができ、「街づくり」に携わる職に就きたいと考えるようになりました。私はそう考えるきっかけを与えてくれた大学に進学したいと強く思うようになりました。

多くの先生方に声をかけていただき、受験勉強へのサポートをしていただいたおかげもあり志望校に合格し、自分の夢へのスタートラインに立つことができました。

部活動や普通の学校生活で得た力、経験、監督に教わった「率先垂範」という言葉を胸に、これからの大学生活を歩んでいき、自分の夢を実現させるという決意をここに表し、代表の言葉とさせていただきます。（Y.M 君）

「コロナ禍に巣立つ生徒ら凜と立つ表彰台の選手のごとく」（校長 岩本）